

印欧語における過去分詞について

齋 藤 治 之

序

筆者は *Das Partizipium Präteriti im Tocharischen* において、中央アジアのオアシス都市トルファン、クチャを中心に用いられ、6世紀から8世紀にかけて文献が残されている印欧語族の一言語トカラ語における、過去分詞をその形態に応じて第1類から第6類までに分類し、過去分詞の成立を、1. 語尾の起源、2. 重複音節の起源、3. 語根母音の起源、4. 過去分詞を造る際の基本形の起源、5. 同一形態による能動・受動用法の起源、という5つの観点に基づき分析・考察した。そして、考察の結果、上記5つの問題に関して以下の結論を導き出した¹。

1. トカラ語の過去分詞の語尾は印欧祖語の完了分詞の語尾である *-uōs-* のみでなく、特にトカラ語 A においては、アオリスト分詞の語尾である *-nt-* もその成立に関与している。
2. 重複音節の母音は強意動詞 (Intensivum) に現れる長母音 *-ē-* ではなく、短母音 *-e-* である。
3. 完了形と語根アオリスト形の融合により成立した過去分詞第1類はゼロ階梯、重複アオリストに遡る第2類は *e* 階梯、完了形と *s-* アオリストの融合により成立した第3類は *o* 階梯であり、第4、5、6類はトカラ語内部において成立したものである。

4. 印欧祖語に遡る過去分詞第1、2、3類においては、起源的に上記3に記した形態を示す極めて僅かの数の語根が過去分詞の基本形として用いられ、一方その他の多くの過去分詞形は基本形に倣った類推形である。
5. 同一形態による能動・受動用法の起源はトカラ語における発展ではなく、むしろ印欧祖語において認められる現象である。

特に上記5の同一形態による能動・受動用法は他の印欧語にも見られる現象であり、本稿においてその起源について詳しく論じてみたい。

1. 印欧語における過去に関する分詞について

① *-to/-no-* 語幹による分詞

多くの印欧諸語がこれらの接尾辞により過去分詞を形成する：skt. *hi-tá-* “gesetzt”, *sthi-tá-* “gestanden”, lat. *laudā-tus* “gelobt”, russ. *otkry-t-* “geöffnet”, dt. *gelob-t-*; skt. *gīr-ṇá-* “verschlungen”, aksl. *děla-nŭ* “getan”, russ. *da-n-* “gegeben”, dt. *genomm-en*

② *-us-* 語幹による分詞

完了分詞を造るために用いられる：skt. *cakṛ-vān-* (gen. *cakṛ-ūṣ-ah-*) “gemacht habend”, gr. *παιδευκώς* “erzogen habend”, toch. AB *yāmu* “gemacht habend, gemacht worden seiend”

上記ドイツ語訳から明らかなように、*-to-*、*-no-* 接尾辞による分詞（動形容詞）の能動・受動の態に関する区別はそれぞれの動詞が表す他動性および自動性に従っており、他動詞の場合は分詞は直接目的語（被動作主）に（z.B. dt. *geschlagen*, *getragen*, *verdreht*）、自動詞の場合は分詞は主語（動作

主)に (z.B. dt. *vergangen, gewesen, eingeschlafen*) 関係づけられる。

-us- 接尾辞による分詞 (動形容詞) は、ギリシア語やサンスクリット語、バルト・スラブ語では態の区別に関して他動詞、自動詞の区別なく能動で用いられるが、トカラ語においてのみ *yāmu* (*gemacht habend, gemacht worden seiend*) のように能動および受動の意味を示す。このようなトカラ語の分詞の態に関する振る舞いはトルコ語のような非印欧語の言語における分詞の用法を想起させる。トルコ語においては、-miş 接尾辞による完了分詞は次の例文が示すように、トカラ語の -us- 接尾辞による過去分詞同様、能動および他動の両方の意味で用いられる: *kocasını terk etmiş kadın* “die ihren Mann verlassen habende Frau” vs. *terk edilmiş koca* “der verlassene Mann”²

ただし、トルコ語においては能動・受動用法においてそれぞれ接尾辞の前に能動・受動語幹が現れる点が、接尾辞の前で同一の語幹が現れるトカラ語と異なっている。周知のように、トカラ語は他の印欧諸語と比較して、特に名詞類の範疇において、トルコ語に代表される膠着語と同様の格変化を示している。例えば、Toch. A nom. *kāšši* “Lehrer”, obl. *kāšš-im*, instr. *kāššin-yo*, perl. *kāššin-ā*, kom. *kāššin-aśśāl*, all. *kāššin-ac*, abl. *kāššin-āš*, lok. *kāššin-am* のように、名詞の格変化において具格 (instr.) 以下いわゆる第二次格 (die sekundären Kasus) が斜格 (obl.) に -yo, -ā, -aśśāl, -ac, -āš, -am という後置詞的な接辞としての格語尾を付加することによって造られている。このようなことから、トカラ語の -us- という同一接尾辞による過去分詞の能動・受動用法が分詞の用法に関して同様の現象を示すトルコ語、さらに詳しく言えばトルコ語とともにチュルク語に属し、10 世紀頃トカラ語滅亡の原因となったウイグル族の言語である古ウイグル語の上層言語としての影響によって成立したと考えることが最も論理的であると思われる。

一方、トカラ語における分詞の同一形態による能動・受動用法の起源をト

カラ語内部の発展ではなく印欧祖語に遡るものであるという考えが他の印欧語との比較により提示されている。例えば、アルメニア語の *-eal* に終わる分詞は、同一形態による能動・受動用法を示し、主語および動作主の格に関する現れ方に基づいて以下の用法が存在する³。

- ① 受動用法（文法的主語は主格で、動作主は *i* + 奪格あるいは単独の具格で表される）：

ew êr na and zawowrs k'ařasown p'orjeal i satanayê = καὶ ἦν ἐν τῇ ἐρήμῳ ἡμέρας τεσσαράκοντα πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ (Mk 1, 13)

- ② 自動詞の能動用法（動作主は主格で表される）：

matowc'eal borot mi erkir paganêr nma = λεπρὸς προσελθὼν προσ-
εκύνει αὐτῷ (Mt 8, 2)

- ③ 自動詞の能動用法（動作主は属格で表される）：

Yaynžam matowc'eal ařakertac' n nora asen c'na = Τότε προσελθόντες οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ λέγουσιν αὐτῷ (Mt 15, 12)

- ④ 他動詞の能動用法（動作主は主格で、目的語は対格で表される）：

Ew nok'a t'ořeal vatvataki zgorcish. gnac'ín zhet nora = οἱ δὲ εὐθέως ἀφέντες τὰ δίκτυα ἠκολούθησαν αὐτῷ (Mt 4, 20)

- ⑤ 他動詞の能動用法（動作主は属格で、目的語は対格で表される）：

nora ənkec'eal zjorjs iwr. yareaw ékn ař YŠ̄ = ὁ δὲ ἀποβαλὼν τὸ ἱμάτιον αὐτοῦ ἀναπηδήσας ἦλθεν πρὸς τὸν Ἰησοῦν (Mk 10, 50)

上記の例文が示すように、*-eal* 分詞による能動用法においては、動作主の格表示に関して、②、④のように動作主が主格で表される文と、③、⑤のように動作主が属格で表される文の2種類が存在する。

動作主が属格で現れる③、⑤のような文の起源に関する考察を最初に行ったのは A. Meillet である。彼はアルメニア語の *-eal* 分詞の起源を祖語の **-lo-* 接尾辞による動作名詞に遡ると考え、例えば *nora bereal ē zna* “er hat ihn getragen” のような文の *nora bereal ē* “il a porté” の部分は元来 “il y a porter de lui” の意味を表しており、目的語とともに全体的には “es gibt Tragen von ihm ihn” あるいは “es gibt sein ihn-Tragen” を表すとしている⁴。これに対して、E. Benveniste は上記③、⑤のようなアルメニア語の構文を古代ペルシア語の *ima tya manā* (gen.) *krtam* “das, was von mir gemacht worden ist” と比較し、このような構文に現れる動作主としての属格の起源を「(所有者としての) 属格+コブラ」という所有構文に求めている。彼はラテン語の「(所有者としての) 与格+コブラ」を仲介として次のような比例を挙げている⁵。

**manā pussa astiy: mihi filius est = habeo filium*
manā krtam astiy: mihi factum est = habeo factum

このようにして、Benveniste は上記のアルメニア語の構文における動作主としての属格の起源も古代ペルシア語の場合と同じように所有者としての属格に求めようとしている⁶。

nora ē handerj: eius est vestimentum = habet vestimentum
nora ē gorceal: eius est factum = habet factum

ただし、アルメニア語においては非所有者・物は主格ではなく対格で現れる点において両者は異なっている。上記④ *ew êr na and zawowrs k'ařasown p'orjeal i satanayê* = καὶ ἦν ἐν τῇ ἐρήμῳ ἡμέρας τεσσαράκοντα πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ (Mk 1, 13) のような *-eal* の受動用法においてはこの分詞の起源が受動分詞であることが推測される。しかし、⑤ *nora ənkec'eal zjorjs iwr. yareaw êkn ař YŠ* = δὲ ἀποβαλὼν τὸ ἱμάτιον αὐτοῦ ἀναπηδήσας ἤλθον πρὸς τὸν Ἰησοῦν (Mk 10, 50) のような能動用法に関しては Benveniste はその起源をはっきりとは述べておらず、古代ペルシア語 *ima tya manā krtam* において受動分詞 *krtam* を含む受動構文が、中世ペルシア語 *man kart* を経て、1人称語尾の付加とともに現代ペルシア語 *man kardam* のように能動文に再解釈されたのと同様に、アルメニア語の目的語としての対格形も本来は主格であったものが能動文への再解釈とともに対格になった、つまり *-eal* は本来受動分詞であると考えているようである⁷。

Benveniste はペルシア語とアルメニア語に議論を限定しているが、トカラ語においても接尾辞 *-us-* による分詞が、アルメニア語同様、同一形態で能動・受動の用法を示している。また、受動用法においては動作主として属格が現れることも注目に値する。

- ① 受動用法（文法的主語は主格で、動作主は属格、具格、Perlativ で表される）：

(au)s^apa nīša tañ^a țarkauw (Toch B 525b2) “Fürwahr, ich bin von dir aufgegeben.”

tñi (ka)pśiñño nu tri wältsem lyalyku knānmuneyo puḳ traidhātuk (Toch A 249alf.) “Aber durch deinen Körper [ist] die ganze dreitausendfache Dreiwelt mittels des Wissens erleuchtet worden”

kusne šam lāntsānā špaṃ palko o(nkaḷaṃ) (Toch A 78b1) “Der Elefant, welcher von der Königin im Traum gesehen wurde.”

② 能動用法

(mā onṭam ka)klyusus šemaš tamne [wā](knā) oṅkaḷaṃ [na]š ku[c] škaṃ palkoṣ tāma[t] (Toch A 78b3) “... [aber] wir hatten (nie) gehört: Es gibt einen derartigen Elefanten. Und wie sollten wir [ihn] gesehen haben?”

ここで問題となるのは、(1)アルメニア語では能動用法で、トカラ語では受動用法で動作主として属格が現れる、(2)アルメニア語とトカラ語において同一形態による能動・受動用法が見られる、ということである。

2. 動作主としての属格の用法

印欧諸語においては、受動文における動作主のマーカ―として、人の場合は前置詞句、物の場合は前置詞を伴わない具格あるいは奪格が一般的であるが、ヴェーダ語においてはトカラ語と同様にそれ以外に属格も用いられる。

ラテン語

Germania omnis a Gallis Raetisque et Pannoniis Rheno et Danuvio fluminibus, a Sarmatis Dacisque mutuo metu aut montibus separatur (Germania 1f) “Germanien in seiner Gesamtheit wird von den Galliern und Rätern sowie den Pannoniern durch die Flüsse Rhein und Donau, von den Sarmaten und Dakern durch gegenseitige Furcht oder Gebirge abgegrenzt)

アルメニア語

ew êr na and zawowrs k'ařasown p'orjeal i satanayê = καὶ ἦν ἐν τῇ
ἐρήμῳ ἡμέρας τεσσαράκοντα πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ (Mk 1, 13)

ahiw mecaw tagnapein = φόβῳ μεγάλῳ συνείχοντο (Lk 8, 37)

トカラ語

(au)spa nīša tañ^ā tarkauw (Toch B 525b2) "Fürwahr, ich bin von dir auf-
gegeben."

tñi (ka)pśinño nu tri wältsem lyalyku knānmuneyo puḵ traidhātuk (Toch
A 249alf.) "Aber durch deinen Körper [ist] die ganze dreitausendfache
Dreiwelt mittels des Wissens erleuchtet worden"

kusne šam lāntsānā špaṃ palko o(nkalam) (Toch A 78bl) "Der Elefant,
welcher von der Königin im Traum gesehen wurde."

アヴェスタ語

hiiat xšmā uxdaiš didaiñhē paouruuīm (Y. 43.11) "als ich zuerst von
euch in euren Sprüchen unterwiesen wurde"

ヴェーダ語

*prá samrājo ásurasya práśastim puṃśaḥ kṛṣṭinām anumādyasya . .
kṛtāni vande* (RV. VII 6.1) "Des Oberherrn, des Asura Lob verkünde
ich, des Mannes der Völker, welchem von den Menschen nachzu-
jauchzen ist."

asuryām devébhīr dhāyī víśvam (RV. VI 20.2) "... ward die ganze Asuramacht insgesamt gleich der des Himmels von den Göttern zugestanden"

属格による行為者の表示は、ギリシア語 *θεῶν-φαιος* "von einer Gottheit gesprochen"、アヴェスタ語 *vərəkō-barəta-* "von Wölfen vertragen, fortgeschleppt" のような例が示すように、分詞のような名詞類形 (Nominalform) に多く見られる。このことから、行為者としての属格は最初に動詞の名詞類形において成立し、そこからさらに次の例文が示すように動詞の定形とともに用いられるようになったと考えられている⁸。

トカラ語: *p(e)l[ai]k]n(e) n(o) su w(elyñe śpālmem po) w(e)strā pū[d]ñ(ā)kt(em)tś*
 "Das Spr(echen des) Gesetz(es) aber wird von (allen) Buddhas (das Vorzüglichste) genannt." (B 597 bl)

アヴェスタ語: *kahe nō iḍa nāma āyairyāt kahe vō urva frāyezyāt* "von wem wird nun unser Name gepriesen, von wem von euch unsere Seele verehrt werden?" (Yt. 13. 50)

それに対して、行為者としての具格は動詞の名詞類形においては見られず、最初から名詞類型とは関係なしに独立した用法において成立したと考えられている。また、本来具格は動作主としての人ではなく作用を与える事物 (wirkende Sache) を表す手段でもある⁹。

トカラ語: *ptāñkaṭ kaṣṣi śākyamuni waste p̣armañk want-wraskeyo śarkyo myiṣṭra brhadyuti* "Der Buddha, der Meister, Śākyamuni, [unser]

Schutz [und unsere] Hoffnung, wird von Erkrankung durch Windkrankheit gequält, o Brhaddyuti!" (A 20 a2)

アヴェスタ語: *vohū managhā yehiiā šiiāoθanāiš gaēθā ašā frādəntē* "mit Vohu-Manah, durch des Tätigkeit Haus und Hof von Ašā gefördert werden" (Y. 43. 6.)

しかし、次のように具格が動詞の名詞類形とともに用いられる例も見られる。

トカラ語: *keṣt̪ yokaisa [m]emyoṣ̣ wnołmi šwātsi yoktsiṣ̣ kawāmñenṭar* "Von Hunger [und] Durst gequält, verlangen die Wesen nach Essen [und] Trinken." (B 286 b3)

また、すでに述べたように具格が事物ではなく人の例も多く存在する。

アヴェスタ語: *hiiaṭ xsmā uxδāiš dīdaiḡhē paouruuīm* (Y. 43.11) "als ich zuerst von euch in euren Sprüchen unterwiesen wurde"

このことから、属格の定形動詞文への使用範囲の拡張と同様に、具格も名詞類形および動作主としての人へとその使用が拡張されたことが考えられる。

3. 同一形態による過去分詞能動・受動用法

すでに述べたように、アルメニア語およびトカラ語においては過去分詞が同一形態によって能動・受動の両用法を表すことが可能である。トカラ語に

つについては同様な現象を示すトルコ語などからみて上層言語としての古ウイグル語の影響も考えられるが、以下のようにアルメニア語に同じ現象が現れることからこれを祖語の段階に遡るものであると考えることも可能である。

- ① 他動詞の能動用法（動作主は主格で、目的語は対格で表される）：

Ew nok'a t'oleal vatvatalaki zgorcism. gnac'in zhet nora = οἱ δὲ εὐθέως ἀφέντες τὰ δίκτυα ἠκολούθησαν αὐτῷ (Mt 4, 20)

- ② 他動詞の能動用法（動作主は属格で、目的語は対格で表される）：

nora ankec'eal zjorjs iwr. yareaw ékn ar ĪS̄ = ὁ δὲ ἀποβαλὼν τὸ ἱμάτιον αὐτοῦ ἀναπηδήσας ἦλθεν πρὸς τὸν Ἰησοῦν (Mk 10, 50)

- ③ 受動用法（文法的主語は主格で、動作主は i+ 奪格あるいは単独の具格で表される）：

ew êr na and zawowrs k'ařasown p'orjeal i satanayê = καὶ ἦν ἐν τῇ ἐρήμῳ ἡμέρας τεσσαράκοντα πειραζόμενος ὑπὸ τοῦ σατανᾶ (Mk 1, 13)

ここで問題となるのは、上記②の例文のようにアルメニア語では動作主が属格で動作の対象が対格で表される文は能動文と見なされるのに対して、トカラ語では (*au*)*s̄pa n̄isa tan̄^d tarkauw* (Toch B 525b2) “Fürwahr, ich bin von dir aufgegeben.” のように動作主が属格で動作の対象が主格で表される文は当然のこととして受動文となることである。どちらの構造が祖語の段階の状況を反映しているかについては議論が分かれるところであるが、K. H. Schmidt はアルメニア語のような、Kopula + passivisch verwandtes Verbaladjektiv + Agens im Genitiv を祖語の基本的な構造と見なしている。このようにして彼はトカラ語のような構文から、受動用法の過去分詞が能動

用法に再解釈されアルメニア語のような構文が成立したと考えている¹⁰。

一方、アルメニア語が祖語の古い段階の状態を保持していると考えられることも可能である。その一つの理由として、言語類型的な観点が挙げられる。非印欧語のオーストロネシア語族のパイワン語には以下のようなアルメニア語同様に「属格＋他動詞の能動態＋目的語としての対格（話題格）」の構文が存在する。

ku *l-in-ulu* *a* *itju*
 [ich(gen.)] [aufheben] [(Topik)] [Kaki-Frucht]
 “Ich habe die Kaki-Frucht aufgehoben.”

この構文は一種の能格構文とも考えられ、このことからアルメニア語における動作主としての属格は能格言語における能格に対応し、動作の対象としての対格は絶対格に対応すると言える。さらに推論を進めれば、印欧語が元来能格言語であった可能性も排除できないであろう。この観点からすると、トカラ語の「属格＋他動詞の受動態＋主格」のような構文は K. H. Schmidt の考えとは逆に、アルメニア語の「属格＋他動詞の能動態＋目的語としての対格」が再解釈された結果であると考えられることも可能である。また、印欧語が能格言語の特徴を持っていたことはトカラ語の動詞からも伺うことができる。トカラ語には次のような主に現在第 8 類（他動詞）に対し現在第 3 類（自動詞）という他・自動詞の対立が見られる。A *nkāš*, B *nakšām* (Prs. VIII) “zugrunde richten” vs. A *nkatār*, B *nketār* (Konj.III) “zugrunde gehen”; A *tskās*, B *tsakšām* (Prs.VIII) “(ver)brennen (tr.)” vs. A *tskalune*, B *tskemar* (Konj.III) “verbrannt werden, brennen (intr.)”; A *kāšt*, B *kešām* (Prs.II) “zum Erlöschen bringen” vs. A *ksalune*, B *ksetār* (Konj. III) “erlöschen (intr.)”; A *pākšānt*, B *pakšām* (Prs. VIII) “zum Reifen bringen, kochen (tr.)” vs. A

pkalune, B *pkelñe* (Konj. III) “reifen, kochen (intr.)”; A *knāštār* (Kaus. Prs. VIII), B *knastār* (Kaus. Prs. IX) “erfüllen” vs. A *knatr-ām*, B *knetār* (Konj. III) “zustande kommen, in Erfüllung gehen”; A *nāmseñc*, B *namṣām* (Prs. VIII) “beugen, (ver)neigen” vs. A *nmālune*, B *nmetār* (Konj. III) “(ver)neigen (intr.)”

トカラ語の接続法第3類はゼロ階梯の語根と *-o-* というテーマ母音から成る語形を示す。印欧祖語の動詞体系として近年、*-mi* 系列と *-H(a)* 系列の対立¹¹、あるいは active 系列と inactive 系列の対立¹² が提唱されている。従来、同一の動詞語根が語尾の区別により能動・中動という態の区別を表すと考えられていたが、上述の系列による対立においては動詞語根はどちらか一方の系列に属し、後の印欧諸語におけるように同一語根が双方の系列に属することはない。この様にして、例えば語根 **h₁es-* “(da)sein”, **steh₂-* “sich hinstellen” は前者、**b^hueh₂-* “wachsen, werden”, **kei-* “liegen” は後者に属する。前者に属する動詞の主語は生物で動作主であり、後者に属する動詞の主語は無生物で非動作主である。この関係を図示すれば以下のようになる¹³：

active		inactive	
imperfective	perfective	process	state
present	aorist	medium	perfect
(active verb: subject = agent; inactive verb: subject = non-agent)			

トカラ語においては直説法第8類と接続法第3類の対立において上記の図式的対立が良く保持されていると考えられる：

nakam ṣamāññeṣṣe maim ṭalskw ālyaucemṭa snai ynāñmñe tākam (B

27a5) “Sie werden das mönchische Denken [und] Fühlen zugrunde richten. [und] untereinander wird Nichtachtung sein”

nke[tə]rm(e) nk=ālyauce ynāñmñe (B 27a6) “wenn ihnen jedoch gegenseitig die Achtung verloren geht,”

saim̐ p̐arman̐k̐ cī śaiṣṣentse lakle raskre yāmṣiyeñc^ā ṣarne p̐aine k̐arsnoyeñc^ā inte kc=eśne tsaknoyeñc^ā mahūrtstsana āṣṭam̐ tom̐ empalkaicci k̐arsnoyeñc^ā tsarkanoyeñc^ā p̐akṣiyeñc^ā (B 231 a3f.) “Dir, dem Schutz [und] der Hoffnung der Welt, taten sie bitteres Leid: Hände [und] Füße schnitten sie dir ab; wo auch immer stachen sie dir die Augen aus; die diademgeschmückten Häupter schnitten dir die Rücksichtslosen ab; sie quälten dich [und] kochten dich;”

k_use no sū yāmor alyek̐ ikene yāmtr̐a alyek̐ ī(ke)ne p̐kelñe tuntse yānmāṣṣam̐ (K 2b 2f.) “Welches aber [ist] die Tat, davon er, wenn er sie an dem einen Ort tut, an einem anderen Ort die Reife [Vergeltung] erlangt?”

kwīpe-onmiṣṣem̐ p̐wārasa tsaksau śmoññai śaulaṣṣai mās̐ prutkaṣṣāñ^ā (H 149.26 /30 b3) “Mit den Feuern von Reue [und] Scham verbrenne ich die Lebensgrundlage, und nicht umschließt sie mich [mehr].”

ま と め

以上のように、語根 *nāk* “zugrunde richten (akt.); zugrunde gehen (med.)”

を例に取ると、B *naḡṣām* (Prs.VIII.akt.) vs. *naḡṣtar* (Prs. VIII. med.) のような対立ではなく、*naḡṣām* (Prs. VIII. akt.) vs. *nkeṭār* (Konj.III.med.) のような対立が本来態の基礎を成していたと考えられる。接続法第3類は *o* 階梯 (AB-*a-*, -*e-*) のテーマ母音が特徴的であり、これは

active		inactive	
imperfective	perfective	process	state
present	aorist	medium	perfect

における inactive verb の語尾 1sg. -*a* < -*hə*, 2sg. -*tha* < -*thə*, 3sg. -*e/-o* の3人称と一致する。このことから B *naḡṣām* (Prs. VIII. akt.) vs. *nkeṭār* (Konj. III. med.) が態のより古い段階の対立を示していたことがわかる。すでに述べたように、アルメニア語における動作主としての属格は能格言語における能格に対応し、動作の対象としての対格は絶対格に対応する。またトカラ語における上のような態の対立の存在からさらに、印欧語が元来能格言語であった可能性が増して来ると言える。アルメニア語およびトカラ語における過去分詞の同一形態による能動・受動の両用法の表現も印欧祖語の能格性と関連付けることが可能であろう。

〈注〉

1. Haruyuki Saito: Das Partizipium Präteriti im Tocharischen, Wiesbaden 2006, 573f.
2. Margarete I. Ersen-Rasch: Türkische Grammatik, Ismaning 2001, 212.
3. 千種眞一：古典アルメニア語文法、東京 2000、269f.
4. Antoine Meillet: Esquisse d'une grammaire comparée de l'arménien classique, Wien 1936, 127f.

5. Emile Benveniste: La construction passive du parfait transitif. In: Bulletin Société de Linguistique de Paris (=BSL) 48 (1952), 52-62, 56.
6. Emile Benveniste: La construction passive du parfait transitif. In: BSL 48 (1952), 52-62, 60.
7. Emile Benveniste: La construction passive du parfait transitif. In: BSL 48 (1952), 52-62, 53.
8. Karl Horst Schmidt: Zum Agens beim Passiv. In: Indogermanische Forschungen (=IF) 68 (1963), 1-12, 7f.
9. Karl Horst Schmidt: Zum Agens beim Passiv. In: IF 68 (1963) 1-12, 10.
Silvia Luraghi: On the Distribution of Instrumental and Agentive Markers for Human and Non-Human Agents of Passive Verbs in Some Indo-European Languages. In: IF 90 (1985), 48-66, 62f.
10. Karl Horst Schmidt: Zum umschriebenen Perfekt in idg. Sprachen. In: IF 67 (1962) 225-236, 234.
11. Thomas V. Gamkrelidze/ Vjačeslav V. Ivanov: Indo-European and the Indo-Europeans (Part I), Berlin/ New York 1995, 254f.
12. Helena Kurzová: From Indo-European to Latin, Amsterdam/ Philadelphia 1993, 115f.
13. Helena Kurzová: From Indo-European to Latin, Amsterdam/ Philadelphia 1993, 118.

参考文献

- Emile Benveniste: La construction passive du parfait transitif. In: Bulletin Société de Linguistique de Paris (=BSL) 48 (1952), 52-62
- Thomas V. Gamkrelidze/ Vjačeslav V. Ivanov: Indo-European and the Indo-Europeans (Part I), Berlin/ New York 1995
- Helena Kurzová: From Indo-European to Latin, Amsterdam/ Philadelphia 1993
- Silvia Luraghi: On the Distribution of Instrumental and Agentive Markers for Human and Non-Human Agents of Passive Verbs in Some Indo-European Languages. In: IF 90(1985), 48-66

Antoine Meillet: Esquisse d'une grammaire comparée de l'arménien classique,
Wien 1936

Margarete I. Ersen-Rasch: Türkische Grammatik, Ismaning 2001

Haruyuki Saito: Das Partizipium Präteriti im Tocharischen, Wiesbaden 2006

Karl Horst Schmidt: Zum umschriebenen Perfekt in idg. Sprachen. In:
Indogermanische Forschungen (=IF)67 (1962) 225-236

Karl Horst Schmidt: Zum Agens beim Passiv. In: IF68 (1963), 1-12

千種眞一：古典アルメニア語文法、東京 2000